水曜通信15

東北学院宗教センター編

2022年
2月

LIFE　LIGHT　LOVE

「十字架」
（ルカによる福音書 23:26－31）
田中 忠雄作　1987年

「イエス･キリストの十字架」の場面。ゴルゴダの丘へと十字架を担ぎ、痛みと苦しみのなか、歩みを進めるイエス。後方で十字架を担ぐのは、キレネのシモン。周りにいるのはその姿を悲しみ嘆く人たち。

第９回
泉キャンパス礼拝堂
ステンドグラス紹介

「礼拝と学問」

東北学院ではキャンパスの中心に礼拝堂があります。さらには土樋キャンパスの礼拝堂の奥にはイエス様の昇天のステンドグラスがあります。イエス様によって現実は天国とつながっているのです（神の「無化」による現実の「聖化」）。だから現実は生きるに値する。それを確認するのが礼拝です。

皆さんが勉強するのも、神様の被造物であるこの現実世界を知り、現実世界をより良くするためです。礼拝はそれを支え、学院での営みは全てが礼拝に向かっているのです。「ただ神のみに栄光あれ（Soli Deo Gloria）」つまり「SDG」とは改革派カルヴァンの、そして作曲家 J. S. バッハの座右の銘でした。偶然ですが、「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）」つまり「SDGs」は、その複数形です。

同志社を創立した新島襄も、教会という宗教組織ではなく、もっと広く教育においての神様との出会いを目指しました。学院でも、それが自然に実現されますように。

理事長特別補佐〈宗教センター担当〉　鐸木 道剛

次回：第50回水曜公開礼拝（公開オンライン礼拝）
２月16日配信予定
学校法人東北学院ホームページをご覧ください。
【第１部　礼拝】
説教：長島 慎二（本学工学部准教授）
奏楽：小野 なおみ（本学礼拝オルガニスト）
【第２部　音楽による賛美】
演奏：小野 なおみ
独唱：鈴木 真衣（ソプラノ）

第49回 水曜公開礼拝報告（説教：大西 晴樹、奏楽：菅原 淑子）

2022年１月26日（水）　公開オンライン礼拝

讃 美 歌：285番「主よ、み手もて」
聖　　書：マルコによる福音書２章１－12節
讃 美 歌：312番「いつくしみ深き」
説　　教：「無縁社会と受援力」
頌　　栄：542番「世をこぞりて」

【説教要旨】

世紀末からこれまでの新自由主義政策が労働市場において喧伝した「非正規雇用」や「自己責任」論は、横並び意識の強い集団主義的労働慣行や前近代的家制度がもつ「身内責任」論によって、「助けて」と言えない青年層のホームレス化、引きこもり化という問題を深刻化させた。徹底した個人主義であるリバタリアニズムを信奉しないこの国にあっては、自己責任論は、人を分断・排除するための用語となり、年を経るごとに高齢化しつつある一部の青年層の無縁社会化を促したのである。本説教では、「無縁社会と受援力」と題して、マルコによる福音書第２章１－12節をテキストにしながら、イエス・キリストによる救いの意味を説いた。

（院長・学長・宗教センター所長　大西 晴樹）

前　奏：J.S.バッハ作曲「天にいます我らが父よ」BWV635

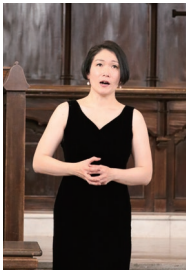
この曲は、45曲から成るオルガン小曲集「オルゲルビュヒライン」に収められ、キリスト教の根幹である「主の祈り」の讃美歌に基づいた作品です。

後　奏：ブルーンス作曲　前奏曲とフーガ　ホ短調

ブルーンスは、北ドイツ学派の巨匠ブクステフーデに学び、ヴァイオリンの名手としても知られた天才的音楽家でした。この作品も、走句、暖徐楽句、即興的挿入、複数のフーガで構成された、典型的な北ドイツ様式です。

（本学礼拝オルガニスト　菅原 淑子）

礼拝後、音楽による賛美（オルガン独奏・奏楽：菅原 淑子　独唱：我妻 万希子）



メゾソプラノ：我妻 万希子

・国立音楽大学声楽科卒
・パリ区立の音楽院在籍後渡英
・ギルドホール音楽学校古楽科修士取得

1. シュテルツェル作曲「あなたが私のそばにいてくださったら」BWV508
2. グノー作曲　アヴェ・マリア
3. ヘンデル作曲　メサイヤより「見よ、おとめが身ごもって」
   「おお、良い知らせをシオンに伝えるあなたよ」
4. カルク＝エーレルト作曲　コラール即興曲集 作品65
   「いざもろびとよ、神に感謝せよ」
5. ジグー作曲　トッカータ ロ短調

カルク＝エーレルトは、ドイツのオルガン作曲家、理論家で、数多くのオルガン作品を残しています。演奏家としてもアメリカ、イギリス、フランスで活動を行いました。

「凱旋行進曲《いざもろびとよ、神に感謝せよ》」は、コラール即興曲集（全66曲）に収められ、その輝かしい雰囲気から、式典などでも頻繁に演奏されます。

サン＝サーンスの弟子ジグーはフランスの作曲家、オルガン奏者で、62年もの長きに渡り、パリの聖オギュスタン教会のオルガニストをつとめました。即興演奏にも定評があった彼の「トッカータ ロ短調」は、メロディの馴染みやすさと華やかさに、常に人気を博しています。

（菅原 淑子）

東北学院の草創期（14）「最初の学生」

― ⑤ 田 村 兼 哉 ―

田村は、宮城県牡鹿郡湊村に1869（明治２）年12月に生まれました。生い立ちや入信した動機は不明ですが、1886年に７人の学生の中で最年少の18歳で神学校に入学します。ホーイは彼について、「オハイオ州ウィンチェスターの教会から奨学金を受けて在学している」と報告する程度で、それ以外の言及はほとんどないことから、特に目立つ学生ではなかったのかも知れません。1896（明治29）年に第３回生として卒業します。同期生には後に第３代院長となる出村悌三郎も含まれていました。

卒業後は山形県の上山で伝道し、1900年に米沢に転任して翌年結婚した後、1904年から埼玉県に移り、越谷、岩槻、大宮、蓬田などを中心としてモール宣教師のもとで伝道しています。1908（明治41）年に宮城県の白石に移り、大河原をも兼牧していましたが、翌年12月に何らかの事情により宮城中会から解職されました。

しかし田村は、伝道界は去っても母校への愛情を失うことはなく、『東北学院時報』では1916（大正５）年の上山での同窓会に参加して「大宮に在住し日本育児院のために働いて」いると記され、1929（昭和４）年にはシュネーダーの帰米を見送る同窓生の一人として紹介されています。

（東北学院史資料センター　日野 哲）

田村兼哉夫妻

― 建築が語る東北学院の歴史（９）―

前々号で、土樋キャンパスの礼拝堂に使用されたラジエータについて紹介しました。設計者は、著名なドイツ人技師でした。

暖房設備には、当時最新の蒸気暖房方式が採用されました。ボイラー室で発生させた蒸気を各室に送ってラジエータから放熱させる仕組みで、校地内には、緻密に計画された蒸気の通り道が張り巡らされていました。

教育機関でこうした設備を導入する際に課題となるのは、施設が段階的に整備されていく点です。とりわけ、地下で各建物を繋ぐ配管の計画は難しく、キャンパスの成長に合わせて柔軟に追随できるシステムが導入される必要がありました。

当時の設備計画の痕跡が、地下に残されています。普段目にできる部分ではありませんが、例えば礼拝堂建設時の図面（fig.１）には、本館と礼拝堂を繋ぐ渡り廊下の地下に配管用トンネルが記されています。さらに右のfig.２は、その部分の地下、現在の本館側から２号館方向を向いて撮った写真ですが、正面にレンガの壁が見えます。これは、将来の配管延長のために設けられた仮設の壁です。実際にこの壁が使用されることはなかったようですが、来たる施設拡張に備えて、一部を簡易的にレンガで塞ぎ、必要な時に解体して延長（掘削）できるようになっていたのです。

（工学部　﨑山 俊雄）

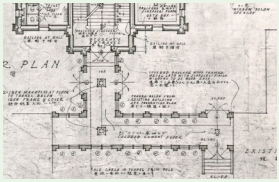


fig.１礼拝堂の地下平面図
（原図を一部トリミング）

fig.２地下に残る設備拡張用の
仮設レンガ壁

ゲルハード記念室とパウル・ゲルハルト（5）

ドイツ敬虔主義の詩人パウル・ゲルハルト（1607－76）は、ドイツ・プロテスタンティズムの詩人としてマルチン・ルターに続く第２の詩人です（Johannes Wallmann, *Der Pietismus*, 2019）。

その詞は、日本の讃美歌にも10曲入っています。107番の「まぶねのかたえに、われは立ちて（Ich steh' an deiner Krippen hier）」もそうです。昨年の学院の中高のクリスマス礼拝で歌われました。この讃美歌はＪ.Ｓ.バッハも「クリスマス・オラトリオ」で使っていますし、ナチスに抵抗して処刑されたドイツの神学者ディートリヒ・ボンヘッファー（1906－45年）の愛唱歌でした。ボンヘッファーは1943年に獄中で「最近、この歌が初めてわかった。長く一人でいて、瞑想すれば、すばらしい内容と美しさがわかる」と書いています（12月18日付書簡）。

ボンヘッファーの獄中書簡
倉松功編訳1956年刊行

またバッハがシェメッリ歌曲集でも作曲した「金色の太陽（Die güldne Sonne）」の詩は、ヨハンナ・シュピリ作『ハイジ』の重要な最後の場面で使われています。ハイジがフランクフルトからアルムに帰って、おばあさんのところにあった古い歌集から、おばあさんに読み聞かせるのがパウル・ゲルハルトのその詩です。

「金色の太陽は、喜びと歓喜に満ち、われらの境を隅々にまで、その輝きをもて、心はずます、愛しき光を送る。・・十字架の苦涯はやがて終わらん。」（杉山好訳）。

ヨハンナ･シュピリ『ハイジ』
マーヤ･ドゥシコヴァ　画
2009年スイス刊行

おばあさんはもう一度聞かせておくれとハイジにせがみ、ハイジはまた読みながら、自分でも嬉しくなり、またおばあさんも幸せな気分になります。そしてさらに「放蕩息子」の話をきっかけに、おじいさんが再び教会に通うことになるというハッピーエンドです。「神様は全てをみそなわし、わたしが思っていたよりも、ずっとよくしてくださる（Der liebe Gott hatte schon Alles ausgedacht, so viel schöner, als ich eswußte）」。これがハイジの物語です。

『ハイジ』の作者ヨハンナ・シュピリは曽祖父以来、敬虔主義の家系で、『ハイジ』では他でも讃美歌を３曲引用しています。パウル・ゲルハルトとヘルンシュミット（1675－1723）、そしてフィリップ・シュピッタ（1801－59 J.S.バッハの伝記作者は同名の息子）作詞の讃美歌です（森田安一『〈ハイジ〉の生まれた世界』2017年）。

そもそも音楽による賛美こそ、敬虔主義そしてメソジストのキリスト教の真骨頂でした。

（理事長特別補佐　鐸木 道剛）

森田安一著　2017年

山本美紀著　2012年

いのち　ひかり　あい
東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE（いのち・ひかり・あい）

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第15号
2022年２月９日発行
〒980-8511　仙台市青葉区土樋１-３-１
発行責任者：宗教センター主任　野村 信
東北学院宗教センター　TEL：022-264-6558
Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp